Samuel Daniel の *Philotas* と Essex 復権運動
17世紀初頭における検閲と抵抗

勝　山　貴　之

1601年3月1日，Lent の最初の日曜の説教を聴きに集まった人々に向けて説教壇に登った William Barlow は，「Queen Elizabeth が天におわす神に選ばれ，その寵愛を受けし者であるという事実を，Essex はまったく忘れてしまった謀反の徒である」と述べ，「伯爵が生きながらえれば，女王の御身にも，この国にも，また福音の伝道という我々の望みにも多大な危惧をもたらすものとなるだろう」と説いた。[1] こうした反逆者としての Essex のイメージは，既に様々な人物の口を通して人々の間に広まりつつあった。Essex 伯の裁判において重要な役割を演じた Sir Christopher Yelverton は，法廷において，「Cataline が Rome の反乱分子を煽動し，陰謀に導いたように Essex 伯爵もまた，彼の共謀者として，教皇派，国教忌避者，無神論者ばかりを身辺に集めていた」と伯の罪科を糾弾していた。[2] 更に，Robert Cecil は彼の Star Chamber での演説をとおして，「宗教の問題，我々の生活の平安に関することが最も重要な事柄である」との点を強調し，Essex は教皇派や，無神論者と結託して「すべての転覆を計った」と，なによりも Essex が国教忌避者であることを非難した。[3]

Essex 反乱事件後，伯爵の裁判および処刑に対する不満分子を抑え込むために Cecil 側が取った対策は，劇や出版物に対する厳しい弾圧だけにはとどまらなかった。裁判の演出を画策し，Bacon に出版用論説文を準備させ，そのうえ，国教会の牧師達を使って，説教壇から繰り返し伯爵の罪科を暴かせた。Essex の処刑の数週間後には，Barlow による Paul's Cross sermon をとおし

て伯爵の謀反の内容が詳細に公表されたのも，こうしたCecilの世論操作を物語るものであろう。体制側は，神に選ばれし女王の権利を踏みにじる異端の徒として，更には飽くことのない野心に駆り立てられ，神の代理たる女王を中心とする世界像の転覆を計った反逆者としてのEssex像を造り上げようとしていた。

こうした世相を背景に，1605年Samuel Danielは，彼の執筆した劇*Philotas*が原因となって枢密院に召喚された。1604年秋，または1605年の初頭に上演されたとされるこの作品は，内容がEssexの陰謀とその裁判の様子を暗に示したものと疑われ，即座に政府の警戒するものとなった。Danielの自身が，劇の上演にかかわった少年劇団the Children of the Queen's Revelsの専属検閲官という地位にあったことも，政府の態度を硬化させた原因であった。

しかし，最終的にDanielが有罪判決を免れたことにより，作品の解釈をめぐって，現代の研究者の間で論争が続けられている。[4] 果して，Danielが反論したように，作品はEssex事件とは全く無関係に執筆されたものなのか。あるいは政府の糾弾は巧みに免れたものの，やはりDanielの真意は舞台上でのEssex事件の再現による，Cecil体制批判にあったのか。この論考では，従来の批評において見過ごされがちであったJames即位当初のEssex復権運動に光をあてると共に，Danielの*Philotas*もまた，そうした復権運動のひとつの現れであったことを，作品の内的証拠および外的証拠の両面をとおして考察してゆきたい。そして，作品が一見して統一を欠くかのように見えるのは，しばしば指摘されてきたような，事実を様々な角度から見つめようとする歴史家としてのDanielの姿勢をうかがわせるものでも，ましてやDaniel自身の劇作家としての未熟さに由来するものでもなく，むしろ検閲等による体制側の弾圧を巧みに逃れようとした当時の文壇の様子を物語るものであったことを示唆したい。

Philotas の中に Essex 反乱事件との類似性を見いだし，劇の弾圧に乗り出した中心人物は，かつて Essex と敵対関係にあった the Lord Viscont Cramborne (Robert Cecil) であった。体制側の処罰を恐れた Daniel は，Cecil に対して弁解の手紙をしたため，その中で作品の題材の普遍性を説いている。

> I sought to reduce the stage from idlenes to those grave prsentments of antiquitie vsed by the wisest nations, I ptest I have taken no other forme in personating the Actors yt pformd it, then the very Idea of those tymes, as they appeared vnto mee both by the cast of the storie and the vniuersall notions of the affayres of men, we in all ages beare the same resemblances, and are measured by one and the same foote of vnderstanding. No tyme but brought forth the like concurrencies, the like interstriuing for place and dignitie, the like supplantations, rysings & overthrowes, so yt there is nothing new vnder the Sunne, nothing in theas tymes yt is not in bookes nor in bookes that is not in theas tymes.[5]

Daniel はここで自分の描いた題材は，あくまで古典に取材したものだと主張し，その主題は常に歴史の中で繰り返されてきたものであって，決して真新しいものではないことを強調している。ここで彼のいう古典，すなわち Daniel が劇の執筆に際して種本とした歴史書は，Daniel 自身が marginal glosses において明記していることから容易に知れる。作品の筋は，Plutarch の Alexander 及び Quintus Curtius の *De rebus gestis Alexandri magni regis Macedonum* に忠実に従っている。

劇の構成は次のようなものである。父からの手紙の中で，派手な振舞いを慎むように諭された Philotas は友人の忠告をも無視して，むしろ王の取り巻き達の偽善を非難する。一方，宮廷では Alexander 自身，Philotas の野心に対する疑惑を抱き，顧問官達の考えをきく。Philotas の愛人 Antigona を脅迫し，Philotas が王に対して不敬のことばを発した事実を聞きだした Craterus

は，王に警戒するよう忠告する。Philotas のもとへは，Ceballinus から王の暗殺を企てる者がいるとの通報があるが，Philotas はそれをなおざりにして王の耳にはいれない。やがて王に対する暗殺計画が発覚し，Philotas は事件を通報しなかったことから共謀の疑いをかけられる。無実を訴える Philotas の弁解に，一時は疑惑を解いた Alexander であるが，Craterus らの陰謀により Philotas は再逮捕されることとなる。拘禁された Philotas は残忍な拷問の末，共謀の事実を認める。しかし最終的に Philotas の陰謀への関与は謎に包まれたままとなる。

劇と歴史書を比較検討することによって，ふたつの材源のうち，特に Quintus Curtius については，ほとんどのエピソードが劇の台詞をとおして再現され，語句に至るまで類似が見られることから，Daniel がこの Curtius の歴史書を座右において劇を執筆した様子がうかがわれる。[6] Daniel の潔白を主張する研究者達が指摘するように，劇作品の中で Philotas の謀反への関与がいまひとつはっきりしないのは，Daniel が意図的に Philotas を美化しようとしたのではなく，むしろ材源においてもその事実が曖昧に描かれていたためだということも，この材源との比較から理解される。

しかし，なにより劇が統一性を欠くとされる大きな原因は，劇の主題がいまひとつはっきりしないということであろう。劇のはじめの部分では，他の者の忠告を聞き入れることをしない Philotas の野心家的一面が描かれ，Chorus も彼の野心を諌めているにもかかわらず，劇の途中からは王の側近たちの陰謀という新たな主題が導入されることにより，主題の一貫性が失われている。そればかりか，劇の終末部分において，Daniel の見解が再び野心を抱いた Philotas に対する非難へと移ることによって，観客は劇中の誰に同情し共感をもって劇を観ていけばよいのか，作者の意図に戸惑いを覚えざるをえない。

しかし，材源との比較をとおして浮かびあがってくるのは，Philotas の陰謀関与に関する事実関係よりも，Alexander と王の顧問役を務める Craterus の関係であろう。そもそも Philotas の物語は，Quintus Curtius の歴史書の

中で，Alexanderが専制君主と成ってゆく過程を物語るひとつのエピソードとして語られている。従って，材源とされた歴史書の中のAlexanderは残虐な王としての印象が強く，Philotasの破滅に関与し，蔭で糸を引く人物として描かれる。これに対し，Danielの劇の中で主導権を握っているのはむしろAlexanderよりCraterusのほうである。Danielはわずかな台詞の変更によって，また場面の追加をとおして，CraterusのPhilotasに対する策略を作品の前面に押し出して描いている。

例えば，劇の前半2幕1場において，AlexanderはPhilotasの近頃の目に余る行動から，彼の野心を警戒し，側近の者達の意見を求めている。こうしたAlexanderの警戒心をいっそう煽ろうとするのがCraterusである。Craterusは，自分がPhilotasを中傷するのは決して自分自身の個人的怨みからではないと，王に前置きしながら，次のように言う。

And what I speake, is for your interest
Which long ere this my conscience vttred had,
But that I fear'd your Majesty would take,
That from some priuate grudge it rather bred,
Than out of care, for your deare safeties sake;
. . .
And now I see you haue discern'd the man,
Whom (I protest) I hold most dangerous.
And that you ought, with all the speede you can,
Worke to represse a spirit so mutinous:
For eu'n already he is swoll'n so hie,
That his affections ouerflow the brim
Of his owne pow'rs, not able to deny
Passage vnto the thoughts that gouerne him:[7]

確かに，材源においても，Craterusが嫉妬からPhilotasを破滅させる策略を巡らせることをQuintus Curtiusは記している。しかし，それ以上にDaniel

は劇の中でこの Craterus の陰謀を克明に描くことにより，作品の主題を野心的な若者の破滅という点に絞らないように，むしろ宮廷人の陰謀の犠牲というもうひとつの主題に一層重点を置くように描いているのである。

こうした Daniel の意図を伺い知ることができるような，改作箇所は作品中多く見受けられる。例えば，劇の中の Alexander は，極めて人間的であり，自己の弱点を知っているばかりか，思い悩み躊躇する。彼は一度は Philotas が陰謀に荷担したに違いないと疑いながらも，Philotas の弁明を耳にして，その無実を信じようとまで心を動かせるのである。

In troth I know not what to iudge herein,
Me thinkes the man seemes surely cleere in this,
How euer otherwise his hopes haue beene
Transported by his vnaduisednesse:
It cannot be, a guilty conscience should
Put on so sure a brow; or els by art
His lookes stand newtral, seeming not to hold
Respondency of int'rest with his heart.
Sure, for my part, he hath dissolu'd the knot
Of my suspition, with so cleere a hand,
As that I thinke in this (what euer plot
Of mischiefe it may be) he hath no hand. (885-896)

この箇所を Quintus Curtius の歴史書にたずねると，次のように記して Alexander の心のうちはぼやかしたまま，それは著者自身にも解らないとされている。

I (Quintus Curtius) could not readily say whether the king believed him, or suppressed his anger deep in his heart; he offered him his right hand as a pledge of renewed favour, saying that it appeared to him that the information was scorned rather than concealed.(VI, vii, 35)

歴史家としてQuintus Curtiusは，Alexanderの内面には触れず，事実のみを語ろうとする。材源においてAlexanderの内心は歴史家にも測り知れないとされている以上，Craterusの嫉妬までをもAlexanderが巧みに利用したのではないかと憶測することも可能かもしれない。これに対してDanielの劇はこうした解釈を許さない。劇の中では，Alexander自身Philotasの無実を信じ，それを台詞にしているからである。そしてこのAlexanderに警告を発するのがCraterusであったということで劇が展開してゆく。Danielは劇の中でこうしたCraterusの私怨にはるかに力点をおいているばかりか，Philotasの無実を信じようとするAlexanderに積極的に働きかけ，Philotasを破滅へと追いやる役割を演じさせているのである。劇中の第3場は，こうしたCraterusの内面を巧みに描いている。王の決心が揺らぐのをおおいに警戒するCraterusは，同胞たちを味方につけるべく，彼らに事の重大さを訴える。

MY Lords, you see the flexible conceit
Of our indangered souereigne: and you know
How much his perill, and *Philotas* pride,
Imports the State and vs; and therefore now
We either must oppose against deceit,
Or be vndone: for now hath time discride
An open passage to his farthest ends;
From whence, if negligence now put vs backe,
Returne we neuer can without our wracke. (1042-1050)

いつなんどきPhilotasへの寵愛から王の心が彼に傾くかもしれないことが予想される以上，用心せねばならぬと彼は説く。そしてPhilotasを糾弾するには証拠が不十分であるとするClitusの意見も，己の目的の達成だけをめざすCraterusの言葉に，封殺されてしまうのである(ll. 1084-1105)。しかし，この場面は，Quintus Curtiusの歴史書においては，ただ“And the rest did not doubt that Philotas would not have suppressed the evidence of the con-

spiracy, unless he had been its ringleader or a participant in it (VI, viii, 10)." としか語られておらず，劇に見られるような Craterus と Clitus の議論は展開されていない。同胞の中から起こる Philotas への弁護とそれに対する Craterus の反論，すべてが Craterus こそが Philotas を破滅に追い込む張本人だとする作者 Daniel の考えを舞台上に再現した場面である。

Craterus を中心とした王の側近の者達の陰謀は，他の登場人物の口からも暴かれ，観客に伝えられる。舞台上に登場した Attaras は Sostratus に語っている。

. . .
When, with some other Lords, comes Craterus,
Falls downe before the King, intreates, implores,
Coniures his Grace, as euer he would looke
To saue his person and the State from spoile,
Now to preuent *Philotas* practises,
Whom they had plainly found to be the man
Had plotted the destruction of them all.
The King would faine haue put them off to time
And farther day, till better proofes were knowne:
Which they perceiuing, prest him still the more,
And reinforc'd his dangers and their owne;
And neuer left him till they had obtain'd
Commission t'apprehend *Philotas* streight. (1167-1179)

更に，Philotas を拷問にかけるかどうかを決定するくだりにおいても，材源と劇には微妙な違いが生じている。原作者Quintus Curtiusにおいては，Craterus に相談をもちかけるのは Alexander の方からであり，ふたりの会談の内容は公けにはされなかったという。材源の歴史書の記述は以下のとうりである。

The king, having summoned Craterus and had a talk with him, the subject of which has not been made public, withdrew into the inner part of his quarters, and dismissing all witnesses awaited until late at night the result of his inquisition. (VI, xi, 12)

材源となった歴史書の中でQuintus Cultiusはこの会談の結果，Craterusは，Philotasを拷問にかける許可をAlexanderから受けたと語っている。これに対するDanielの改変は些細ながらも重要である。拷問に対するCraterusの積極性を観客に印象づけるためにも，DanielはCraterusの方から王を呼び止めさせている。

The Councell being dismiss'd from hence and gone,
Still Craterus plies the King, still in his eare,
Still whispering to him privately alone. . . (1964-66)

そればかりか劇の中では王がPhilotasの拷問を決意するのは，Craterusの説得によるものであることが，舞台に登場する修道女の台詞をとおして一層強調されるのである。

Craterus, with Caenus, and Ephestion,
Do mainly urge to have him tortured;
Whereto the King consents. . . (1976-1978)

Danielの劇では，Philotasを破滅へと追いやってゆく陰謀においてAlexanderは常に受身的な役割を演じている。真実を疑いながらも，一度はPhilotasの言葉を信じるAlexanderの姿に，臣下の者の運命をいともたやすく操る暴君の印象は，材源よりも希薄である。むしろDanielがあくまで陰影深く描き出そうとしているのは，Philotasの破滅に関与した王の顧問官たちの陰謀だといえよう。この点において劇作家Danielの態度は，Alexanderの一連の罪状を描くなかにPhilotasのエピソードを位置付け，暴君となってゆくAlexander

の姿を浮かび上がらせようとする材源の作者の態度と著しい相違を呈している。

更にこの主題は，劇の中で Chorus たちの口をとおして明確に観客に訴えられる。Chorus は，公共の為という名目に，自分達の個人的嫉妬心を包みかくそうとする王の顧問官たちの陰謀を，舞台上において糾弾する。

SE how these great men cloath their priuate hate
In those faire colours of the publike good;
And to effect their ends, pretend the State,
As if the State by their affections stood:
And arm'd with pow'r and Princes iealousies,
Will put the least conceit of discontent
Into the greatest ranke of treacheries,
That no one action shall seem innocent: (1110-1117)

Daniel は，劇の中で大筋では材源に忠実に従っているようにみせながらも，様々な場面や台詞の改変，更には Chorus の言葉をとおして，宮廷における Philotas に対する陰謀に光をあてている事実に疑問の余地はない。Daniel が重視しているのは，実際に Philotas が王の暗殺を企てていたかどうかということではなく，Philotas を陥れようとする王の側近の者たちの策略がいかに功を奏したかということなのである。

しかしここで最も興味深いのは，劇の結末において，突然こうした作品の主潮を形づくってきた流れが阻まれることとなり，王の側近達の陰謀という主題は影を潜め，逆に Philotas の罪科を糾弾する姿勢が舞台の前面に押し出されてくる事実である。作品の結末部にあたる最後の40行において，Daniel は Chorus の口をとおして Philotas を非難する。修道女から Philotas の自白の模様を聞かされた Chorus は言う。

O would we had not heard this latter iarre:

This all his former straines of worth doth marre.
Before this last his foes his spirit commends,
But now he is vnpitied of his friends. (2092-2095)

しかし，材源において Quintus Curtius はこのようには記していない。確かに彼は Philotas の陰謀関与の真実に対して，己の見解を保留にしていることは事実であるとしても，むしろ拷問の行きすぎに対し人々の同情が Philotas によせられた事実を記しているのである。

. . . his torture was continued after the confession was considered an act of cruelty; and now Philotas merited the compassion of his friends.(VI, xi, 40)

明かに，材源の作者 Curtius は Philotas に同情的である。

それでは，今まで Philotas を，王の側近の陰謀の前に倒れた犠牲者として描いてきた Daniel は，何故ここにきて材源を再び改変し，Philotas を謀反人として糾弾する必要があるのか。劇全体の統一性を欠く危険性をあえて犯しながらも，材源を改作する意図はどこにあるのか。劇は，このあと続けて王の残忍さに対する悲嘆を綴りながら，“The which may teach vs to obserue this straine, To admire high hills, but liue within the plaine.”と野心を諌める教訓と共に終る。Daniel は，Philotas の物語を Curtius の歴史書から拾い挙げ，それにどのような主題を盛り込もうとしたのか。Daniel の真意はいったいどこにあるのか，大きな疑問の残るところである。

劇の解釈を更に複雑にしているのは，出版された劇に付された Daniel 自身の手になる“Apology”と“Argvment”の存在である。このなかで，劇をとおしてわれわれが得る印象とは全くことなった主張を，Danielは展開している。“Apology” の中で彼は，王の側近 Craterus と Ephestion について次のような説明を加えている。

Which [Philotas' plot] being by *Ephestion* and *Craterus*, two of the most graue and worthy Councellors of Alexander prouidently discerned, was prosecuted in that manner, as became their neerenesse, and deerenesse with their Lord and Maister, and fitting the safety of the State in the case of so great an aspirer: Who, had he not beene preuented . . . he had no doubt turned the course of the gouernment vpon his father or himselfe, or else imbroyling it, made it a monstrous body with many heads. . . .[8]

そればかりか，"Argvment" の中で Daniel は劇中の Chorus の役割にも言及している。彼のいうところによれば，Chorus は身分の高い人物達の運命のいたずらに同情を寄せるあまり，物事の本質を考察する力に欠けるという。

The Chorus consisting of three *Graecians* (as of three estates of a Kingdome) and one *Persian*, representing the multitude and body of a People who vulgarly (according to their affections, carried rather with compassion on Great-mens misfortunes, then with the consideration of the cause) frame their imaginations by that square, and censure what is done.[9]

しかし，この Daniel の主張は，劇の中において，真実を見抜く力を有することを高らかに詠い上げる Chorus の主張と明かに矛盾をきたしている。

For though we be esteem'd but ignorant,
Yet are we capable of truth, and know
Where they do well, and where their actions want
The grace that makes them proue the best in show,
And though we know not what they do within,
Where they attire, their mysteries of State:
Yet know we by th'euents, what plots haue beene,
And how they all without do personate. (403–410)

Danielのこうした態度の食い違いは，多分に彼の政治的配慮をにおわせる。すなわち，劇中のCraterusの役割をとおして，Essex反乱事件及び裁判における自分の役割をやゆされたのではないかと警戒したCecilにむけての，Danielの自身の保身のための言い訳であったと考えられるからである。そしてそれはまた，当時この作品をEssex事件におけるCecilの役割を糾弾するものとして観る解釈が充分可能であったことをDaniel自身も認識していた事実を裏付けるものである。

それではなぜ現政治体制への批判と取られかねない劇をDanielは執筆，上演する気になったのか。Danielを取り巻く外的要因として，Elizabeth治世晩年及びJames治世初期の反体制文学の動向について考察を進めたい。

Elizabeth晩年の反体制文学を考える時，Richard IIの治世を題材とした劇及び歴史書の存在は注目に値する。Richard IIに関する劇の人気はかなりのもので，女王自身がWilliam Lambardeに語った"I am Ricard II. know yet not that? . . . this tragedy was played 40tie times in open streets and houses."という発言はあまりにも有名である。[10] Richard II劇は，重税にあえぐ人々の政府に対する不満を描いたものであるとともに，老齢化する女王の政権交替の時期にさしかかり大きな意味を持っていた。1599年に出版された歴史書*The First Part of the Life and Raigne of King Henry the iiii*は，たちどころに当局の弾圧の対象となり，作者Sir John Haywardはロンドン塔に幽閉された。Essexに捧げられたこの歴史書は，その表現こそHenry IVの治世をうたっているものの，その内容はRichard IIとHenry of Lancasterの政権交替を描いており，Essex一派の関心を大いに引くものであった。[11] この歴史書の登場に一層警戒心を強めた政府側が，劇や出版物に対する取り締まりに更に力をいれて乗り出した様子は，1599年6月に発布された次の法令からもうかがい知ることができる。

That noe Satyres or Epigrams be printed hereafter
That noe Englishe historyes be printed excepte thay bee allowed by some of her maiesties privie Counsell
That noe playes be printed excepte thay bee allowed by such as haue aucthorytie.[12]

Essex 反乱事件後，伯爵の裁判および処刑に対する不満分子を抑え込むために Cecil 側が取った対策は，劇や出版物に対する厳しい弾圧だけにはとどまらず，政府の刊行物をとおして，更には日曜礼拝の説教壇から徹底した世論の操作がおこなわれた。

しかし，このような言論統制がしかれたことは，裏返してみればそれだけ Essex 処刑に対する不満が，反乱分子を中心として民衆の間に起こりつつあったことの証明でもあろう。事実，そうした世相の様子は，1601年 2 月 London 主教であった Richard Bancroft の残した手紙の中からも読み取ることができる。

A fellow goeth about the streets selling the Ballads where of here is a copy enclosed. He giveth it out that the Countess of Essex made it, which induced many to buy. I am told the ballad was ready half a year ago, upon some other occasion. I have sent for the Wardens of the Stationers. These villainous printers trouble me more than I write of.[13]

Essex への追悼の念を詠った同種の ballad は，*The Roxburghe Ballads* の中にも収録されている。Ballad の第 3 及び第 4 Stanza は次のように詠われる。

Sweet England's pride is gone!
    welladay! welladay!
Whixh makes her sigh and grone
    evermore still:
He did her fame advance

in Ireland, Spaine, and France,
And, now, by dismall chance,
is from us tane.

Brave honour grac'd him still,
gallantly, gallantly;
He nere did deed of ill;
well it is knowne;
But Envy, that foule fiend,
whose malice nere did end,
Hath brought true vertue's friend
unto his thrall.[14]

このballadをとおしてもわかるように，人々はEssexの無実を信じているばかりか，伯爵が宮廷での妬みの犠牲となったと詠っている。

1603年3月24日，Elizabethが崩御，Scotland王Jamesが王位につくが，同年4月10日，Essex事件の共犯者ともくされていたLord of Southampton及びSir Henry Nevilleの解放が行われた。(歴史書*Henry the iiii*の作者Sir John Haywardもこの年に解放されたと思われる。)Chamberlainはこの出来事について，次のような手紙を残している。

These bountiful beginnings raise all men's spirits and put them in great hopes, insomuch that not only Protestants, but Papists and Puritans, and the very poets with theyre ydle pamflets, promise themselves great part in his favour, so that to satisfie and please all, and wold be more then a mans worke.[15]

この時，Southamptonに，Danielがepistleを捧げている事実は注目に値する。Danielのepistleは拘禁から解放されたSouthamptonへの賞賛を詠っている。

The world had neuer taken so full note
Of what thou art, hadst thou not been vndone,
And only thy affliction hath begot
More fame than thy best fortunes could haue done:
For euer, by aduersitie are wrought
The greatest works of admiration,
And all the faire examples of renowne
One of distresse and miserie are growne.[16]

不当な裁きを受けた者に対する同情と賛美が，ここでは包み隠さず表現されているのが理解される。時代の変化に対するDanielの反応は興味深い。Southamptonの復権は続き，更に同年5月17日JamesのPrivy Chamberを構成する20人のgentlemenの一人に任命，7月にはthe Order of the Garterを授与される。The Order of the Garterは，Cecilですら1605年まで与えられることのなかった名誉であった。[17]

Jamesは己の治世において新しい時代の息吹を強調し，出来る限りElizabethの時代の思い出を過去に葬りさろうとしていた。新体制の中で，Essex事件もそうしたJamesにとっては何の意味も持たないものになりつつあったといえよう。またQueen Annaのまわりには，William Herbert, third earl of Pembrokeを中心として芸術愛好家たちが集まり，宮廷の知識人による活動の中心的役割を果たしていた。そしてこの中にはかつてのEssex支持者たちが多く含まれていたのである。

こうした体制の変化の中で，事件のことをおおっぴらに議論することをもはばからない風潮が確かに広まりつつあった。1603年7月1日，Anna女王の面前において，Essex反乱事件をめぐる口論がSouthamptomとGrayの間で繰り広げられた。

She (the Queen) was in discourse with my Lord Southampton touching the Earl of Essex's action, and wondered, as she said, that so many

great men did so little for themselves; to which my Lord answered that the Queen being made a party against them they were forced to yield; but if that course had not been taken, there was none of their private enemies, with whom their only quarrel was, that durst have opposed themselves. This being overheard by Lord Grey, he would have maintained the contrary part, upon which he had the lie given him.[18]

この口論を遡ること2月前には，政府の弾圧は受けたものの，Jonson の *Sejanus* が上演された事実を考えてみても，故 Essex を取り巻く人々の態度には明かな変化が表れていたといえよう。[19] 更に，翌1604年6月には Robert Prickett の長編追悼詩"Honour's Fame in Triumph Riding, or the Life and Death of the late Honourable Earl of Essex" が出版され，Southampton と Mountjoy の二人に献呈されている。この詩の中で Prickett は Essex の名声の復活を堂々と詠っているのである。

From forth the dust, my lines desire to rayse
　bright honors fame, in Triũphs state to ride,
Whose liuing wrth did so adorne his prayse,
　as that his glory shall to the world abide
The only Mirror of a valiant mind.
Whose Honors thoughts, not to base wealth inclin'd
　Doe make him liue, though long since dead,
　And crownes with bayes his buried head. (i)[20]

そればかりか Prickett は，Essex を宮廷における嫉妬と陰謀の犠牲者であったとして同情を寄せている。

But Enuie, why didst thou againe conspire?
　Abusde occasion, why didst thou displease?
Suspition, why didst thou inflame new fire?
　Were all agreed bright honours crest to feaze?

What secret action did inact the thing,
That discontent to Mercies Queene did bring?
She was appeasde, what new sowne seede,
Brought forth such fruite her wrath to breede.(xxiii)

ここでPrickettの詠っているimageこそ，Essex派の者達の主張であり，彼らにとってEssexは決して女王に対する謀反人ではなく，あくまで対立派閥の陰謀に破れた，すなわち敵対するCecil派の策略の前に倒れた英雄にほかならなかった。

そして，この時期におけるEssexに対する人々の同情は異国人の書き記した記録にも辿ることができる。Essex伯処刑の直後に英国を訪れたSettin-Pomeraniaの伯爵が，Essex伯への追悼の気運が高まりつつある様子を目の当たりにしたことを書き留めているほか，Venetiaの大使も"Essex (Essex's son, the third earl of Essex) has an infinite number of friends all devoted to the memory of his father."と母国に書き送っている。[21] Essex復権運動は，ElizabethからJamesへという移り変る体制の中，大きな高まりを見せつつあったのである。

こうした状況において，Danielの*Philotas*は上演された。DanielがJames治世のもとで広がりつつあるEssex復権運動に無関心であったはずはなく，Queen Annaを取り巻くEssex支持者の存在に気づかなかったとは考えがたい。更にはEssex支持者の抱く，宮廷の陰謀の犠牲者としてのEssex像を知らぬはずはなかった。ましてや少年劇団の専属検閲官としての彼の立場を考えれば，それは知らないですまされる問題ではなかった。またCecilへの手紙の中でDanielが主張しているような，劇の題材となったものが歴史の中に数多く存在する普遍的な材料にすぎないとの訴えは，Danielが*The Civil Wars*の作者であることを思い浮かべるなら，そのまま受け入れ難い主張である。なぜなら*The Civil Wars*に付された"Epistle Dedicatorie"において，Danielは歴史は現在を映す鏡であって，現在の社会への註釈となるものだというこ

とを強く主張しているからである。[22]

加えて，当時の歴史劇の状況を思い浮かべてみるならば，歴史を通して現体制への批判とするという風潮が存在したことは明白である。例えば，Danielの友人でもあり，Countess of Pembrokeを中心とした，いわゆる"The Wilton Circle"の同人でもあったFulke Grevilleは，そうした歴史劇の危険性を充分把握していたと思われる。Grevilleはその著書*Life of Sir Philip Sidney*の中で，一般の人々が彼の劇*Antony and Cleopatra*に純粋に詩的効果を求めるのではなく，Essex事件との関連性を読み込もうとする傾向を恐れ，自ら作品を火に投じたことを記している。[23] また，先にふれたJonsonの*Sejanus*がEssex事件を題材にしているのではないかとの嫌疑から，政府の弾圧の対象となったのも，Danielの*Philotas*の上演される前年の1603年のことであった。Danielが，歴史を題材とした作品に対するこうした体制側の反応を全く知らなかったとは考え難い。むしろDanielに必要だったのは，そうした状況をふまえた上で，いかにして体制側の検閲をかわし，その弾圧を逃れるかの術であったはずである。

作品は，敵対する者を破滅に導く王の側近の陰謀を描きながらも，野心を抱くことの危険を説くという点で，一部の批評家たちから主題に混乱をきたしているとされてきた。しかし，この一見，主題の混乱とも思えるような作品こそ，読者の読みの可能性を，また観客の解釈の可能性を広げるはたらきをするといえる。作品の中の作者の態度の曖昧さは，受け手側に，より一層積極的な読みあるいは解釈への参加を促し，作品の背後にある意味を探り，思考するよう問いかける。こうしたいまひとつの読みあるいは解釈の可能性を誘発し，そこに読者または観客独自の考えを読み込ませてゆくことこそが，検閲という体制側の弾圧をごく当然のこととして受けとめられていた社会風潮を，そしてそうした文化を生きる作家たちのとるべき手段であった。従って，この作品を17世紀初頭にまきおこりつつあったEssex復権運動の気運の

中に，今一度据えてみることにより，ひとつの読みの可能性が浮かびあがる。すなわちEssex復権運動を支持する者達にとって，Philotasの野心も，彼の最終的な自白もすべてが表面的な事件の解釈にすぎず，体制側の主張を形式的に取り入れたものに他ならないとの共通の認識である。当時の検閲，更には体制側の弾圧を前に，当然作品はそれに対応する形式を踏んでいなければならないはずであった。Danielの用意した野心の危険性も，そして王に対する反逆を認める自白も，すべてが当時あまりにも一般的すぎるEssex事件への理解であった。そしてそれはあくまでも体制側が作り上げたシナリオどうりの道具だてであった。Essex支持者にとっては作品のそうした形式主義を理解したうえで，宮廷人の権力争いとそれにまつわる陰謀を主題としてこの劇を観たはずであり，そこにこの劇の生命があったはずである。劇は，現Cecil体制への挑戦として，Cecilの描いたEssex反乱事件の筋書きを逆転しながらも，結末で体制側の主張へと内包されてゆく。しかし，劇を観るものにとって，とりわけ現Cecil体制に不満を抱き，Essexの敗北を痛む者にとっては，結末はたとえ体制側の主張に収束されていこうとも，それは問題ではなかったはずであり，劇は彼ら反主流の主張をみごとに伝えてくれるものであったと言えよう。Danielの劇 *Philotas* は，そういった意味でCecilを中心とした体制側のイデオロギーとそれに抵抗する反体制側のイデオロギーの激しい葛藤を，文学という形式をとおして後世の我々に伝えているのである。

注

1 William Barlow D.D., *A Sermon Preached at Paules Crosse, on the First Sunday of Lent, Martii i, 1600. With a short discourse of the late Earle of Essex, his confession and penitence, before and at the time of his death* (London, 1601, S.T.C. 1451), sig. c.4^{r}.

2 State Trials, i, p.1337. この資料はMervyn James, *Sociey, Politics and Culture: Studies in Early Modern England* (Cambridge: Cambridge U.P., 1986), p.418.に言及されている。

3　*Calender of State Papers, Domestic, Eliz., 1598-1601* (London, 1869), p.554.

4　作品の中にEssex反乱事件との関係を読み込もうとする批評にはBrents Stiring, "Daniel's *Philotas* and the Essex Case," *MLQ*, 3 (1942), 583-94. Laurence Michel, ed., *The Tragedy of Philotas* (New Haven: Yale Univ. Press, 1949), pp.36-66.などがある。他方，事件との関連性を否定し，作品をDanielの純粋な文学的アプローチの所産とするものには，代表的なものとしてG.A. Wilkes, "Daniel's *Philotas* and the Essex Case: A reconsideration," *MLQ*,23 (1962), 233-42. などが挙げられる。WilkesはDanielが召喚されたものの最終的になんら刑を受けなかった事実をあくまで主張するとともに，DanielがDevonshireへ宛てた手紙の中で，Cecilを充分納得させたとの記述を重視している。

5　Danielの手紙はLaurence Michel, ed., *The Tragedy of Philotas* (New Haven: Yale U. P., 1949), pp.37-38に引用されている。

6　*De rebus*は既に1553年にJohn Brendeによって英訳され，それが定訳となっていた。記録では1561年，1570年，1584年，1592年，1602年，1614年にそれぞれ再版されている。もっともDanielがCurtiusの原書をもとに執筆したのか，あるいは英訳を使用したのかは不明である。この小論では*Quintus Curtius with an English translation* by John C. Rolfe in the Loeb Classical Library (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1946)を参照した。

7　Laurence Michel, ed., *The Tragedy of Philotas* (New Haven: Yale Univ. Press, 1949), ll. 524-544. テキストとしてはLaurence Michelの版に準拠したものとし，引用は行数のみを示すものとする。

8　Danielの"Apology"はLaurence Michelの編集したテキストに収録されている。pp. 156-57.参照のこと。

9　同様に"Argument"も収録されている。pp.101-2.参照のこと。

10　John Nichols, *The Progress and Public Processions of Queen Elizabeth*, 3 vols. (London, 1823), III, pp. 552-3. この記録はArden Shakesperareの*Richard II*, ed. Peter Ure (London: Methuen, 1956), p.lix.に引用されている。

11　Sir John Hayward, *The First Part of the Life and Raigne of King Henrie the iiii. Extending to the end of the first yeare of his raigne* (London, 1599, S.T.C.1454).

12　Edward Arber, *A Transcript of Registers of the Company of Stationers* (London, 1875), iii, pp. 316 ff. この記録はLillian M. Ruff and D. Arnold Wilson, "The Madrigal, the Lute Song and Elizabethan Politics," *Past & Present 44 (1969): 20.* 及び *G.B.Harrison, ed., A Last Elizabethan Journal: Being a Record of Those Things Most Talked of During the Years, 1599-1603* (London: Routledge & Kegan Paul, 1933), pp.20-21. に引用されている。

13 *Cecil Papers LXXXVIII* (27 Feb. 1600-1). この記録は Charlotte Carmichel Stopes, *The Third Earl of Southampton* (Cambridge: Canbridge U.P., 1922), p.221.に引用されている。

14 *The Roxburghe Ballads,* ed. Charles Hindley (London: Reeves and Turner, 1874), ii, pp. 202. 更に i, pp.394-398 も参照のこと。

15 *The Letters of John Chamberlain,* ed. Norman Egbert Mclure (Westport: Greenwood Press, 1939), I, p. 192.

16 この epistle は Laurence Michel のテキストに引用されている。p. 44.参照。

17 Leeds Baroll, *Polotics, Plague, and Shakespear's Theater* (Ithaca: Cornell U. P., 1991), pp.38-40.

18 G.B.Harrison, *A Jacobean Journal: Being a Record of Those Things Most Talked of During the Years 1603-1606* (George Routledge and Sons, 1946) pp. 42-43.

19 1603年5月25日 G.B.Harrison, pp.31-32.

20 Robert Prickett, *Honour's Fame in triumph riding, or the Life and Death of the late Honourable Earl of Essex* (London, 1604, STC. 20339).

21 "The Diary of the duke of Settin's Journey through England, 1602"ed. G. von Bulow, *Transaction of the Royal Historical Society*, new ser., vi(1892), p.13.

Calender of State Papers, Venetian, 1603-1607. (London, 1900), p.308. この記録は Vernon F. Snow によって彼の論文のなかで紹介されている。Vernon F. Snow "Essex and the Aristocratic Opposition to the Early Stuarts" *Journal of Modern History* 32 (1960): 224-33.

22 Samuel Daniel, *The Civil Wars*, ed. Laurence Michel (New Haven: Yale U. P., 1958), p. 311.

23 *Sir Filke Greville's Life of Philip Sidney*, ed. Nowell Smith (Oxford: Clarendon Press, 1907), p. 155-56.

Synopsis

Samuel Daniel's *Philotas* and the Rehabilitation of Essex: Censorship and Resistance in the Early Seventeenth Century

Takayuki Katsuyama

Early in 1605 Samuel Daniel was summoned before the Privy Council to answer charges of having made seditious comments in his *Philotas* on Essex's rebellion and trial. Protesting that the play was disinterested history, he insisted that he was innocent of staging an allegory of events leading up to 1601. Eventually Daniel was not given the serious punishment, but the degree of his culpability remained problematic.

In the course of modern Daniel scholarship and criticism, critics have been divided into two groups: those who are inclined to convict the author, and those who try to vindicate him. The aim of this essay is, through the examination of the sources and his utilization of them, to explore Daniel's intention in his dramatic work, and at the same time, to reconsider his part in the dissident activity, Essex's rehabilitation, in the early seventeenth century.

The question of sourvces for this play is a relatively simple one. Through his experience in historical writing, Daniel learned the value of documentation. As Daniel indicates in marginal glosses, the primary sources for his *Philotas* are Plutarch's *Alexander,* and the sixth book of the *De rebus gestis Alexandri magni regis Macedonum* of Quintus Curtius Rufus. A close examination of his use of the sources demonstrates how

much he depended on Quintus Curtius's *Histories*. He followed the source closely, but it is important to note that Daniel tried to shift the emphasis to the theme of the machinations of the King's ministers against Philotas. Through the characters in the play, Daniel suggests that Essex's enemies, the queen's ministers, had played a large part in his ruin as his own ambition had.

In considering why a man in Daniel's position launched a play which might stir the Privy Council to action, we should not ignore the treacherous currents around the author, the rehabilitation of Essex, in the first few years of King James's reign. The fall of Essex was far from being a matter of dead history. Essex's popularity revived, and his honor unstained was restored by the old Essex faction. His image as the chivalric Protestant hero was re-created and elaborated by poets and ballad-writers. The presentation of Daniel's *Philotas* was part of these political and cultural phenomena.

At the end of the play, Daniel changed his sympathetic attitude toward Philotas and accused him of ambition and disloyalty, leaving an ambiguous impression on the audience. Yet, the ending of the play might have been created by Daniel as the functional ambiguity of works composed under the conditions of censorship. The indeterminacy of the play surely alerted the audience to the possibility of hidden meaning. The ambiguous ending of his play must have been a highly sophisticated system of oblique communication, of unwritten rules whereby the playwright could communicate with the audience.